

お客様各位

株式会社 山喜農園
新潟県魚沼市原1280-1
TEL. 025-794-2455
FAX. 794-4168
E-mail: info@yamaki-noen.co.jp
HP Address. http://www.yamaki-noen.co.jp

球根情勢報告

*** 今回の情勢報告は長いです。**

FAX しません。HP には載せません。E-mail か郵送にて配布いたします。

最初の5ページは、読み飛ばしていただいて良いかな？

(本当は他の球根屋さんや市場の方には読んでほしい…。

＝ベテラン切花農家さんには、もう一度思い出してほしい。

若手切花農家さんには、自分たちの将来を見つけてほしい。)

温室レポートは6ページあたりからです。(最初の5ページはいくらなんでも硬すぎなんです…。)

平素よりお引き立ていただき誠にありがとうございます。

5月末より開花が始まった当社の試験栽培も、10日午前中の高知県土佐地区の皆様の研修視察を持って、終了いたしました。(次期作の都合。)

5月にワグダにて開催された『リテイス』での新品種発表会がつまらなかったのも、「今年はどうなんだろう？」と不安があったのですが、

「様々な意味で見方を変えていかなければいけない」と考えていましたので、結果的には大変刺激的な品種を確認することが出来ました。

来社いただきました皆様、様々なアドバイスを頂いた皆様には大変感謝いたします。ありがとうございました。秋の試験栽培準備が10日午後から始まりました。また、9月～10月には大勢の皆様からお越いただきます様、よろしく願い致します。

秋の試験栽培は、約400ポットとなりました。

*15年の国産球試験は、350ポット→360品種強となること、本日決まりました。

①延べ人数での来場は、例年になく多かった様です。

一人で15回以上来てくれた人もあり、継続して百合の成長を観察してくれた方が増えた様です。

②市場の方の来場が減った様です。これは残念…。

一方、少なからず仲卸・買参人の方は増えた様です。

市場のその先の人達とお話しできたことは、非常に参考になる話が多かったです。(6月20日の世田谷ポットバック事件…これは原点回帰の必要性の象徴だと受け止めております。ありがとうございました。)

③6月は出張を控えて出来るだけ品種チェック/同一品種内コンディション別チェックに勤めました。

「違い」をしっかりと確認する為です。違いが分からなければ「商品説明」出来ませんから。

試験栽培を始めた頃から当社課長を中心に職員が行っておりますが、毎朝毎朝撮影/調査後に花粉を除去する、しおれた花を除去する事によって、咲き終わりの花の色、枯れ方にも意識をしてもらっています。レポート管理する項目に入れていなかったのですが、そのことの重要度(品種選択/開発)をもう一度再認識しました。

***花が咲くまでの情報は、切花生産者の為。**

***花が咲いてから枯れるまでの情報は、市場/仲卸/花屋さんの為。**（結果的には切花生産者の為…。）

1996年から思いつきで始めた試験栽培でしたが、その時代時代で、ニーズが変化していきます。

百合の育種開発には時間がかかります。

20年前の要望は、「同時開花性」が求められていました。

15年前の要望は、リアルトに代表される「花の美しさ」が求められていました。

10年前の要望は、「物流耐性」の重要度が大幅にアップされてきていました。

百合の育種は、

交配してから2~4年後に花が咲きます。

選抜してから2~3年後に花が咲きます。

最初の試験球が当社隔離温室にてテスト栽培されるのは、交配してから6年後となります。

交配してから8~9年後に、一般切花農家への試験供給が始まり、13年後に新品種として一定以上の球数の供給が開始されます。（切花は、球根が供給されたその次の年から流通する。）

例えば、1996年に交配された品種は、2004年くらいから試験供給が始まります。

この球根は、T1/T2からの肥培球、又は温室内で生産された、まだティッシュカルチャー増殖段階で、過剰に摂取されたホルモンが、球根の体内に残っている球根のリボンから増殖・肥培された球根であるケースが多いのです。

通常の球根生産がジャンルにのっていない為、品種本来の特徴は発揮されていない状態なのです。本物が供給されるのは、2008年くらいから…。

ちょっとビックリなのは、育種会社レベルでは、「シグナム」は、13年産あたりからようやく「新発売」という認識だという事。

テブルダンス(OT)・ザンバジ(OT)は、まだ試験が終わってなくて、通常サイクルの球根生産体系から生産された球根が供給できるのは、14年産又は15年産からなのだそうです。（L.A/O.TはO.Hより通常**球根生産**体系にのってくるサイクルが早いのに！）

どうやら私たちはまだ本物のテブルダンス・ザンバジを見ていないという事の様です。（ちなみに育種者本人含むです！）

県内の百合切花農家からの速報によれば、ザンバジのケースでは、輸入球と国産球からできる切花品質差異は相当大きいとの事！＝これは今後この品種が受ける国際市場における評価が、どうなるのか大きなヒトとなります。

皆さん、テブルダンスやザンバジ・ホロス・ベントーム・アステリアン・パシフィックオーシャン・カーネ etc がまだ開発中という認識有りますか？

シグナムは、2000年交配/2006年当社隔離温室試験。

2008年~2012年産までの球根流通はあくまでも試験流通…。

世界市場での調査機関を兼ねているこの5年間がものすごく大事だという事です。

この期間に潰れていく品種がいくかに多い事か…。（ちなみにシグナムは、ヨーロッパ・アジアでは、10,000,000本を超えるヒトとなる様子。果たして日本ではどうなる？）

私たちは、本当に球根農家と力を合わせて品種を育てようとしているのかな～？（ちゃんと見極めて導入していたのかな～。）

19年間にも及ぶ試験栽培をもう一度考え直してみました。

特に、2005年以降この10年間、何を見つけようとしてきたのか？

「今日の気持ち」は、「カブラカの改良版」

「シベリアの改良版」

「シラの改良版」

「ソルボンヌの改良版」

「イエローウインの改良版」

日本市場において普及している品種、日本のO.H市場のベースを支えてくれている品種、その寿命が残っているうちに、次の品種を見つきたい。そういう思いで、品種を探し続けていた様です。(10年間ずっと同じ気持ちで見ていた訳ではない。思いなやみ、途中には色々なことを模索していました。)

もう一度上記した品種を見直してみました。

なぜ主力品種に育ったのか？そして10~20年以上ベースを支え続けてきたのか？

ポイントは4つくらいに整理されそうです。

①球根が強い。植物として強い。

②大勢の切花生産者が関わった。その為、切花流通期間が12か月間に渡り供給が安定していた年が長い、又は多い。(定期安定供給品種が無い、又は少ないと市場規模全体も縮小する。新品種の活躍できる土俵も縮小する。) ←ここは重要。

③植物としては強健だが、切花農家にとって決して栽培難易度が低い品種ではない。(秀品が作りにくい。)

④必ずしも生産者が作り易さ・経済性(生産コスト etc)の良さから選んだわけではなさそう…それではなぜ？

*絶対的な植物としての強さ・輸送耐性・切花保管耐性・花保ち・葉保ち・最終花まで咲いて花形が変化しない etc.

もしかしたら、「切花流通価格」という形で、切花流通側の皆様、運送業者・市場・仲卸・花屋さん etc. 関わる皆様の試行錯誤の結果がこれらの品種を育て上げてきたのではないかと考えています。

「植物の力」という点では、ガブランカは、やはり「百合の王様」である。19年目の結論です。(うれしくもあり、残念な気持ちもある。園芸品・嗜好品のむずかしさ…。)

先代の社長が流行も求めないで、60~120年以上昔に作られた「芍薬品種」を守り続けなさいと…。

その結果が近年の芍薬のゲーム/ダリアのゲームの中から、苗供給業社レベルでは既に感じられ始めたことは、「植物としての強さの大切さ」の確認だなあ…と思いはじめています。芍薬品種は、園芸品種の中では突飛に寿命が長い？なぜ？考えてみて下さい。最近のヒット商品である「かぐや姫/白雪姫」ですら、もうパテントが切れているんです…(育種家の努力が報われる時間が短すぎる。法律変わるんですよね?)。

この次の期待種である「朱鷺姿」を流通にのせられるのは、果たして何年後？

ところで、「100年以上も前に育成された品種」って物語になりませんかね〜。

昔の品種、「主力品種を大切に守っていきこう」という話をすると、年寄扱いされます。

あたかも発展・進化の妨げの様に扱われます。勘弁してください。

さすがに頭にきています。

園芸ですから…。様々な方法がありますよね…。

何を守りたいのか？品種？それとも…。

同じ失敗を繰り返すわけにはいかない…。(フェリッパ・アイリス・フリージア・グラジオウス・透かし百合 etc.) 分かっているほしい事…。

そしてこれは嗜好品たる「花」という素材を扱う切花園芸業界においては、「球根切花の挑戦」なのだという事も…。

①ガブランカ

日本の切花農家が求める品質を維持している球根生産会社(球根農家)は、南半球でほぼ1軒のみ。北半球で3軒、多くても4軒くらい…。

10/12サイズから14/16サイズのセット買い。

20/22サイズから24/26サイズのセット買い。(または18/20サイズ含む。)

この購入バランスを維持しなければ、この品種の球根生産はなくなるから。

夏場を中心にこの品種を上回る「植物の力」を持っている品種はまだありません。(なお球根生産量は、16/18、18/20サイズを他国で消費しきれない量に対する分しか日本が必要としているサイズは、生産できない。他の国が協力してくれるとは思わないほうが良い。)

物流耐性という意味で、夏場の流通期に絞って言えば、この品種を超える品種は？

②シイ

ほぼ日本のみで消費されている品種。蕾を硬く切っても、色を付けて切っても、簡単に「口が割れない」長期輸送性に優れた品種特長を持つ。この物流耐性を持った品種…同系花色の新しい品種の中にありますか？

高温期作型でも花シミ事故が少ない。低温時高温時の発根力に優れている。

南半球産長期抑制作型でも欠かせない品種。

一般の球根農家は、あと2~3年くらいで生産停止。V.Z社が独自にどれだけこの品種の球根生産を守ってくれるかに架かっている。他の国は協力してくれない。(シイVOF。頑張ってくれ。)

③イエローウイン

中国・ベトナム・台湾・メキシコなどの新興球根消費国では、圧倒的にコンカトル/マサが主力品種、中国を除くこれらの国々では、**黄色が白色より圧倒的に重要！←これは重要な要素！（中国は白と黄が同じくらい重要。）**

ベトナムだけが唯一黄色品種に色の濃さを求めています。急速に経済成長が続いている国の中で富裕層だけではなく、新中間層も花の消費を伸ばしているのは、ベトナムとメキシコ。ベトナムの新中間層がイエローウインを支持しています。

ベトナムがこの品種を使わなくなった時がこの品種が厳しくなる時。

日本市場だけで支えるのは…ちょっと厳しいでしょう…この品種の替わりは？まだ見つかっていません。

④ソルボニス

品種の命運は、中国市場が握っています。

中国が別の品種の需要を増やした時、ソルボニスの12/14~16/18サイズの使用を辞めた時、この品種の寿命は尽きるでしょう。

まだ時間は残っているはず！

元々物流耐性に秀でていた品種というわけではないので、何となく替わりの品種を見つけやすそうに見えます。

とは言うものの、この品種は本当に不思議な品種で、水上げ能力は弱いように見えますが、他品種よりも市場着荷時に水落ちしていても、水上げ後に「口が割れない」という特徴がある様です。(これも物流耐性と言えるのかも…)

第一世代・スターG/ループ/カサブランカから、第二次世代・アプロロ/マルコポーロ/バルソへと移行し、その後第三世代・ソルボニス/ベリア/シイ/イエローウインが出てくるまでの間、スピサ/バルバダール/レ/セプリアンティ/ガレイ/バルカント etc. 様々な品種が生産流通しました。その間これら品種は『期待の新品種』（この言葉…今やブLAGグジョーク？）として、O.H系多様化という意味では一定以上の役目を果たしました。

なぜ第四世代を作るのに時間がかかっているのか？←これについては後ほど…。

次の品種が出てくるまでの間をつなぐ為、最近発表となっている品種は、過去にヒットした品種ばかり「親」に使って、近親交配が繰り返され（成功体験！）、むしろ水上げの悪い花じみの出やすい品種が、その特性や弱点を検証されることなく発表されている様に感じています。

これは、我が球根業界が抱えている球根切花だから起きてしまう独特な構造的な問題。そして園芸商品の宿命。

ある育種会社では、種間交配種であるL.AやO.Tの育種・育成途中で方向性の間違いに気がついて、2000年代前半に90年代半ばまで育種素材の選択を戻して、開発をやり直している。(全ての育種会社ではない。)

その結果が…もうすぐ、又は既に見えてきている様です。(白O.T系の中の数品種で一つの花の寿命が、O.H系を超えている品種が出てきた！1本の茎の寿命も明らかに長くなってきている。)

A.H系・O.H系の現状についての難しさ。

L.A/O.T以上に実は、「物流耐性」というポイントで、その育種方法のシンプルさから本来の「植物の力」を持っているはずであるA.H/O.Hでの新品種の登場。(残念ながら、ポイントを外した品種を選ぶケースが多すぎです！)

そしてそれらが世界の球根農家に受け入れられて、球根生産が拡大する速度。それに対して O.T 系が O.H 系の需要を超えて、世界の球根農家から支持され、球根農家から切花農家に球根を供給される速度…。

世界の球根農家は、どちらを選ぶのか？

どちらが早く私たちの求めている姿となって手元に届くのかは、向う 3~5 年くらいの間に見えてくることでしょう。

リボンヌの球根生産面積を守ることは、日本だけではもう無理です。小規模でも理解しあえる仲間を増やして、日本向けの品質と供給を維持する事くらいかなあ〜。(始めています。)

⑤シベリア

さあこの品種の行先を占う事、悲観的な話をする事は、今日現在においては、「天に唾する」くらい、デリケートな問題の様ですね！

蓄取りがはやっていますね…この事により品種の寿命が延びるのか、縮むのか？
どちらでしょうかね？

切花の生産性は良くないですよ！

日本のような小規模営農経営体系で、個々の栽培技術がもっとも発揮しやすい品種ですよ！(カサブランカ共々)

新興球根消費国における 1 軒当たりの経営本数は、中心的な経営層だと最低 500,000~1,000,000 本くらいなのです。これも各国の品種の選択に影響しますよね。(大きな会社は、3,000,000~16,000,000 本！)

さらにもう一つの重要要素。世界の切花市場で「競り」を行う市場機能・物流拠点としての市場機能を持ち合わせているのは、日本とオランダだけでも良い事。各国において、花に求められるポイントが相当違うのだ、という事を意味しています。(ほとんどの切花農家が、園芸卸売会社と相対取引です。ほぼ世界中の花の流通は、松原方式…。)

日本国内で推定流通本数は、22,000,000~27,000,000 本、もしくはそれ以上？
今や 10,000,000 本以上流通している品種は、シベリア以外無いのではないのでしょうか。

世界で栽培されている百合球根栽培面積でも、ちょっとその牙城は揺らがない様な気がします。

さて、この『シベリア』

日本もしくはそれ以上に高い割合で生産消費している国があります。
勿論『中国』です。(推定一億本以上)

日本においては、絶対的な物流耐性を持ち得ていることが流通消費側から見いだされ、「キレイさ」以上に評価されることになったこの品種。

実は、球根単価が安過ぎて、球根農家があまり儲かっていないのだという事。この事実は重いです。(球根生産性はあまり良くない。)

日本において最も切花としての評価が高い品種を栽培している 20 代/30 代の球根農家が「これじゃ続けられない」と感じている。

これってまずいでしょう…。

中国市場がいくらで買ってくれるか分からない…。

中国市場が何球使ってくれるか分からない…。

流通耐性に秀でた白品種。仮にそれが白 O.T であつたとしても、そんな品種が中国市場に供給されて、彼らに支持されてしまったら。

2~4 年くらいの間に、これに挑戦する動きが出てくるはずですよ。

更に加えて、中国が政策的にワグ産/南半球産球根の取引を停止したら…夜もおちおち寝ていられないというコメントをした輸出業社が複数軒出てきておりました。

「シベリアの終わりが見え始めた」と言えば、「守る」って実は「挑戦」なのだという事、そして「球根農家と共に」という事なのだ、と考えてもらえるかなあ？。

まだしばらくは大丈夫だと思う…。

栽培現地調査に初めて参加してくれたクソ君（コンパニオン・マロンNES・カイテ etc を生産している農家。トップクラスの品質優秀農家です。シベリアPOF3 軒の内の1軒でもあります。）は、2年前にシベリアの増殖を打ち切ったそうです。替わりに、20品種も新品種を導入しているとの事。

今回このクソ君が、育種会社の日本国栽培現地調査（山喜農園）に参加してどのような感想を持ったか、考えをどのように修正したのかは、また後ほど…。

レオワイン・ソルボンヌ・シベリア。どんなに物流耐性に秀でていても、優良農家が球根を作ってくれなければ採花率は落ちる。蕾が6~7cmくらいにしかなれない球根。それじゃあ商品とは言えないでしょう。

オブラカの次にシベリアを守るために何をすべきか。（もう考えていますよね。）

*5品種とも、多くの品種の中の5品種でしかなかった。生産者の評価は決して高くはなかった。（最初納品したころは、切花農家からダメだしされていたんですよ…。最初から褒められたのは、オブラカとソルボンヌくらいかな。）

何故日本の主力品種に育ったのか、改めて考えてみましょう。

それにしても、サッカーワールドカップは面白かった。
攻める国、守る国、組織的、個人技。特徴が出てますよね。

正しい事なんて行く通りもあり！が日本の良い所なのでしょう。
様々な個性が生かされる強いベースを作り上げたいものです。

個性の否定をしているのではない事。くれぐれもご理解ください。（そもそも何の為に1,000ロット近くも試験しているんだ！）

ここから温室栽培となります。

最初の5ページの様に硬くなり過ぎないように…。

透かし百合系

ドライセール用の品種照会が主目的。丈が伸びない鉢物用・タンゴシリーズ・八重・変わった花色など、今年は球根の品質が良かったので面白かったです。

レッドツイン系の品種が色違いで発表となっていました。透かし百合/L.Aの多様化の為には、変わったものが作り易い「透かし百合」は、重要なカテゴリなのでしょう。決して百合切花のメインにはならないでしょうが、必要なアイテムだと思います。

L.A系

育種家別に触れるべき内容ですが、Vletter社の新品種群が劇的な変化を遂げた様です。

輪付き・花保ち、すごい改善です。衝撃的なレベルでした。後は到花日数…。

V.Z社の赤はチュリップの百合咲きに対して、百合のチュリップ咲きと言える新品種を発表をしてきました。これは面白い。

近年オレンジ色で3品種を紹介し、2品種ほどいけそうな雰囲気が出てきていますが、加えて黄色で2品種、冬用/夏用が出てくる様です。

昨年5系統を、本年4系統に絞り、最終的に2系統にする。
当社における試験期間が、従来よりも長くなりました。

開発も慎重になってきましたね。

ワールドフラワー社は、L.A創世記には、このカゴリーの先端を走り、様々な品種を紹介していましたが、その後R.トリティのヒット以降、音なし。もう10年以上これといった日本向けヒット作は有りませんでした。

昨年オランダで目に留まる品種が4~5品種有り、偶然オランダにおいて主要なL.A切花農家が興味を持った品種と3品種ほど重なりました。「それでは試験してみよう」という事で、今回初めて、当社試験温室に参加してくれました。(L.A部門で。)

白・ピンク・黄色1品種ずつ、良さそうです。

球根農家としても良品質球根を作ってくれる会社として有名ですので、期待したいところです。

L.Aのカゴ系が出てきています。L.Aの八重も2品種ほど出てきました。生産性の高いL.Aで、変わり咲きが出てきてくれると多様化が進みます。L.Aも遂にここまで来たのかあ。

鉄砲百合/L.0 (LL0, L00 何が何だかわからない…)

来場いただいた仲卸・花屋さんが1番見ていたカゴリー。私が温室にいた時だけで言えば、1番多く質問されたのがこの分野…。特に鉄砲百合について。(当社職員に聞いたら私と同じ感触だったそうです。)

何となく理由が分かりました。

その理由は、当社の企業秘密といたします。

昨年から頼んでもいないのに、やたら2倍体鉄砲百合の試作が増えています。

花屋さんの見方と育種会社の見方は違っています。目的は違っているように見えますが、仲卸・花屋さんの目線の延長戦に育種会社の方向性があってきたら面白いでしょうね。

LOOT系 (これは鉄砲百合/L.0から分けて見ないと…。どちらかと言えば、O.H系の仲間。)

今はV.Z社が先行しています。たぶん3社くらいがすぐに始まります。(もう始まっている。)

大きな可能性を秘めているとの事。(世界市場で考えると…。)

きっと10年くらい経つと、O.H/O.T/LOOT系の垣根はなくなるんだろうなあと思います。

まずは近い将来、O.H/O.T系の区別がつかない様にならないと…。

「香り」のしない(少ない)百合を作る。

O.H系球根の生産性を現状の1.5~1.8倍にする。

大変なことに関わらせていただいているなあと思います。

14年産から試験導入始まります。関わってもらえませんか？

大手の花屋チェーンの方のこの分野に対するコメントも大変参考になりました。

O.A/T.A系

今年はゴールデンエラのみ(生産停止。)。来年は、T.A系がいっぱい来る予定だそうです。

O.T系

仲卸・花屋さんから出た衝撃の一言！

「同時開花性がダメ？」

「誰がそんなこと言ったの？」

「それってメリット！」

使う場面を間違えば、「それはクレーム案件！」

「ちゃんと**商品説明**しなさいよ…。」

「競り人からは何て言われているの？」←冗談です。これは言われていません。

同時開花性がメリット…。「O.H系は、第1花が咲いた後が続かない。」「もうちょっと一緒に咲かないのか？」と15年以上前に言われてましたよね。

今それが出来たら「今の時代の要求じゃないのか〜。」と思ってましたが、今でもその需要はあるんだそうです。

「自分が作った切花・商品説明が出来ないと…」

赤系で面白いのが出てきました。

複色系も多様化してきました。

八重は今の所3品種。まだまだ完成度は低いです。(但し、*オランダ*の育種は、O.H系八重からO.T系八重開発へ進んでいくようです。)

白系品種の中でいち早く、一花一花の花保ち水保ちが大幅に改善されてきている品種がある様です。

切花農家の皆さんに試験供給開始できるのは養成球バールで本年から納品できる品種がある様です。

本格的に市場に流通できるのはあと3年後くらい。

同時開花性、作業性が改善されて、*オランダ*並みのものが出てくるのはやはり5年後くらい。

その先鋒が*テーブルダンス・ザンパジ*だと考えてみて下さい。この2品種のポテンシャルは、まだ日本市場においては、評価できませんが(育種社曰く、まだ本物の球根は供給されていないそうですし…。)

諸外国の反応は良い様です。中国・ベトナム・台湾・メキシコでは、切下がよく出来るから…それでO.Tへの評価が高まったという事情もある様なので…。

もうちょっとですね。

将来につなげる品種の(本命では無い)特徴も良くつかんで使っていきましょう。もうちょっとです。

ピンク系は…目下試行錯誤中です。慎重に導入を進めましょう。

お問合せ下さい。

O.H系

八重

分類すると1) *ミルシー*系がスタート? R.リリー系、ロイヤル系。

2) *アスカ*系がスタート? *グレッタ*社、旧*マークリ*社、*ワールドフラワー*社、*マック*社

今の所は、R.リリー系とロイヤル系が先行している。

*ローズリリー*系は、*デローフ*社。ロイヤル系は旧*サンデ*社。

第3勢力になるのは、日本から持ち込まれた、*クリスタルブランチ*の八重。*リボン*の八重。(両方とも枝替り)をベースに置くはずの、V.Z社

3つの流れで育種は進行していくみたいです。

*デローフ*社(R.リリー系)が大きく先行していて、他はまだ始まったばかりだと思います。

*ワールドフラワー*社は、*デローフ*社とタイアップして、八重O.Tの開発に着手するみたいです。他の*グレッタ*社、*マック*社、V.Z社も狙いはそちらにある様子。

現状の八重O.H系の特性を聞いてみて、「なるほどな」と思うのは、切花又は鉢物を栽培する期間中、その管理方法はほぼ一般のO.H系に準じますが、蕾を開かせる為には切花にした場合、必要な水の量が、約5倍、窒素量は約2倍植物体内に入れることが必要なのだとか。

そんなことは計算上、試験場バールでは言えたとしても、現場バールでは無理。

結果的には咲かせた形での切花流通となる。諸外国で「鉢物」がヒットしているのはこの為?

実際2倍も窒素を入れたら花保ちも悪くなりますからね。

各社の目標は、「蕾のまま流通させられる八重O.H/O.Tを作る事」、「輸送性が良くて、開花性が良い、花保ちが良ければ最高。」

さあ、何処が最初にモノにしますかね〜。(R.リリーのいくつかはその可能性が出てきていませんか?)

一重

白 隔離で2品種から3品種「*カサブランカ*国産切花産地」にぜひ試験してもらいたい品種がありました。球根も確保できます。

今年の試験栽培の衝撃的だったポイントの一つです。

白2 シベリアみたいだなと思うO.H系が4品種

シリアみたいだなあと思う O.T 系が 2 品種ありました。O.T 系で花保ちが、ザンバジ よりずっと良い…シリアまで到達できるのか？同時開花性でない…。ちゃんと一花ずつ咲いていく…。

遂に来たかという感じです。

O.H 系で 3 品種だけ球根が養成球根確保できます。

赤 個性的な品種が出てきています。

ピンクより早いなあ～やっぱり国際市場規模が大きいからでしょうか？

ピ 多様化は進んでいます。Plamv 問題は？物流耐性は？

育種会社/輸出業社/球根農家は、新品種養成球根を使って欲しい様です。

お問い合わせください。

計 17 人のオランダ人が約 5 日間調査に入っていました。

いくつかのメッセージは、

1) 隔離栽培試験の規模を約 3 倍まで増やしてほしい。堀之内の渡辺君が取り組んでいる栽培方法による試験区を設置すれば、新潟の施設作型は言うに及ばず、北海道から九州までの広範囲の作型を再現できる。

育種会社側がプロジェクトの立ち上げに全面協力するとの事。結構本気みたいです。(昨年から言われていたのですが。)

2) 来年は、1 週間試験時期を早めたいという希望を持っていたが、「何とか今まで通りの時期にしてほしい」との事。当社課長によれば、箱植え栽培で試験する以上もう一週間早くしないと栽培管理難易度が高すぎるとの事で、意見が分かれており、目下検討中。

育種家は 6 月 15 日までは交配作業。7 月 5 日以降は開花している新花の選抜作業を行わなければいけない。加えて、「渡辺型」作型の調査を同時に行う為には当社の開花時期が前倒しになるのは困る。

調整が難しいです。

3 人目の球根農家

3 年前から毎年来てくれているのが、Original グループ「ホルム社」のティム君。(まだ 20 代)

「ハセブラを減らした。」「サツカ増やした。」「P. ブロント増やした。」「ハセブラが全然足らなくなった。」「サツカ・P. ブロント買ってもらえない。」(日本以外の国の話。)

使用目的とマーケットが違うんだな～とのコメント。マーケット毎のニーズの差をはっきりとさせてくれた言葉！

「球根単価も違うしね！」と半分嫌味も言っておきました。

今年初参加のクリク君 (20 代)

オランダに帰国後、「やっぱりシリア作る。誰か養成球分けてくれ。」と、目下養成球確保作業開始中。←よかった。

2008 年から続いている Plamv 問題

新潟に代表される国産球使用型切花産地は品種更新の先端を走っていたはず。この 4 年間はそれをする事が出来なかった。

津南農業公社における当社球根栽培圃場を見たそれぞれの育種会社のコメント。

「なんでこんなにトウレカが定植されているんだ。」と悔しがる。

V.Z 社は顔が引きつっていた。

新潟は平野部も、山間地も 5 月下旬以降、晩秋・初冬まで一定以上の国産球使用をもう一度考えましょう。

円安は追い風。(輸入球との価格差減少?)

品種の多様化が進みつつある状況なのも追い風。(育種会社は、V.Z 社だけでなく、日本産球根の意味を理解した。)

物流耐性を意識すれば、日本産球使用切花品質は、品質市場のイニシアチブは取れる。

市場流通・仲卸流通を考えれば、彼らのハンドリングに耐える品種品質の重要度はやはり高い。

大変収穫の多い刺激的な試験栽培でした。

7月中旬よりしばらくぶりに出張/営業活動再開いたします。

「花が安いのに球根の話なんてなあ」ですが…、全てが過渡期だと思っています。
頑張って第四世代を作りましょう！第三世代もお忘れなく…。

Plamvが入っていない養成球。「次の次の品種」1,000球から60,000球単位で、Offerが入り始めました。
ちょっと今までとは養成球商売と捉えられ方が違ってきています。「過去のV.Z社の養成球を販売する事が
新品种のプロモーションにつながる」という成功体験ではありません。別の理由が見いだせた様子です。

以上 森山 隆



<http://www.lily-promotion.jp/>
私共はLPJの趣旨に賛同し
協力・応援しています